

西から来た死体

錦川鉄道殺人事件

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	のぞみ一三〇号	7
第二章	岩日北線の夢	35
第三章	ホクロの男	59
第四章	六作目の映画	83
第五章	並木伸という男	113
第六章	愛の確執	141
第七章	二十五年の秘密	171

西から来た死体

錦川鉄道殺人事件

第一章 のぞみ一三〇号

1

五月十二日、ウィークデイの東京駅16番ホーム。
ム。

つい数日前のゴールデン・ウィークの時、東京駅はどこもかしこも、人で、あふれていた。特に子供の叫ぶ声や、時には、泣き声までしたのである。

しかし、今日は、閑散としている。まるで時

間が止まってしまったかのように、人の姿もまばらである。それでも、東京駅のホームは、列車の出発と到着の時間に合わせて、否応なしに動いていく。

16時53分（午後四時五十三分）、時刻表通りに「のぞみ」一三〇号が16番ホームに到着した。広島を12時53分に発車した列車である。

ドアが開く。

あのゴールデン・ウィークの喧騒けんそうが嘘うそのように、降りてくる乗客はまばらで、何よりも子供の声が、しない。

乗客がほとんど降りて、清掃員が車内に入ろうとした時、9号グリーン車の辺りから突然、叫び声が、聞こえた。

それを聞いて、ホームにいた駅員が、慌てて

9号車のほうに、走っていった。

のぞみは十六両編成で、今年の春のダイヤ改正から、全車、一番新しいN700系の車両になっていった。

東京駅に入ってくる時は、下りとは逆に16号車先頭になる。

叫び声を聞いて、ホームを全速力で走っていた駅員は、9号車にたどり着いた時には、息を弾ませていた。

「こっちに來てくれ」

と、車掌が車内から、大きな声で叫んでいる。のぞみは8号車、9号車、そして、10号車が、グリーン車である。その真ん中の9号車、上りは、逆に入ってくるから、9号車の車内でも、1番から16番まで座席は全て逆になっていて、

16番が到着時は先頭になっている。

その16番のA、窓側の座席、そこに座っている着物姿の女性が、ぐったりと、座席にもたれたまま、全く動こうとしない。

醜く口を開いていて、青ざめた表情の車掌が、それを指さしながら、

「どうやら、すでに死んでいるようだが、すぐに一一九番してくれ」

連絡を受けた鉄道捜査官二人と、JR東海の助役一人が飛んできた。

鉄道捜査官の一人が、女性に顔を近づけてから、

「正式には、司法解剖の結果を待たなくてはなりません、明らかに青酸中毒死ですね。かすかに、アーモンドのような匂いがしますから。」

おそらく、死後一時間は経っていると思いません」

と、いった。

「死んでいるんですか？」

驚いた顔で助役が、きくと、鉄道捜査官は、「間違いなく死んでいますよ。それでも救急車と警察を呼んで、運んでもらいましょう」

と、いった。

もう一人の鉄道捜査官は、被害者が座っていた16Aの座席の周辺を、何やらしきりに、調べていたが、

「ありませんね」

と、いった。

「何がですか？」

と、車掌が、きいた。

車掌の顔は、まだ、青ざめたままである。

「もし、青酸カリを飲んだのだとすると、たいていはコーヒーか、あるいはジュースのようなものと一緒に飲むのが、普通です。それなのに缶コーヒーや缶ジュースの類いが、見つからないのです。まさか青酸カリだけを飲んだとは思えません」

「とすると、自殺よりも他殺の可能性の方が高いですね」

「そうです」

「犯人は、この女性に青酸カリを飲ませておいて、その缶とか容器を持って、下車したんだと思います」

と、捜査官は、車掌に眼をやった。

座席上の物置棚には、被害者の物と思われる

ハンドバッグが、置いてあった。

「広島から乗車した女性の、隣りの座席には、五十歳くらいの男性が座っていたことは、覚えているのですが。広島から東京まで四時間、途中、八つの駅に停まりますので……」

と、車掌が、いった。

のぞみ一三〇号の停車駅は、広島を出てから岡山、姫路、新神戸、新大阪、京都、名古屋、新横浜、品川と、終点の東京までに、八駅もあるし、車両を移動したかも知れない。車掌が、そのうちのどこで、その男が降りたのかわからないというのも、無理はなかった。

夜、被害者が持っていた障害者手帳から、女性の名前は、沢田澄江^{すみえ}、六十五歳と判明した。障害者手帳によると、現住所は、東京の等々力^{とどろき}

にあるマンションになっていた。

障害は三級で、司法解剖をした医者の話では、被害者の耳には、補聴器が入っていたというから、障害者手帳にある通り、おそらく耳に、障害を持っていたのだろう。

ハンドバッグの中には、他に着替えや化粧道具、ハンカチが入っていたが、財布や携帯電話は、見つからなかった。

翌日、十津川は朝一番で、若い三田村刑事と、女性刑事の北条早苗^{ほろじょうさなえ}の二人に、障害者手帳にあった等々力のマンションに行つて、被害者、沢田澄江のことを調べてくるようにと、いった。

2

問題のマンションは、すぐに、わかった。

等々力の駅前にある、近辺でも有名な、三十二階建ての真新しい超高層マンションだったからである。

「グラント等々力」という名前の付いた三十二階建てマンションの最上階三二〇四号室が、被害者の沢田澄江の部屋だという。

エントランスの、受付にいた三十代後半と思われる、女性管理人に、三田村が警察手帳を見せてから、まず北条早苗が、

「沢田澄江さんは、いつから、こちらのマンションに、住んでいるんですか？」

と、きいた。

それに答えて、女性管理人が、

「このマンションは、今から二年ほど前にできたんですが、沢田さんは、その時に入居されて、ずっとここに、住んでいらっしやいます」

と、いった。

「沢田さんの部屋は、最上階の三十二階ということですが、その部屋は、どのくらいの広さがあるのでしょうか？」

三田村が、きいた。

「2LDKですが、結構広いのではないかと思います」

「月々の部屋代は、いくらですか？」

「沢田さんのお部屋ですと、六十万円になりません」

「これは、念のためにお聞きしますが、沢田澄江さんは、家賃月六十万円の部屋に、この二年間ずっと、住んでいるんですね？」

「ええ、そうです」

「これまでに、部屋代が滞ったことはありませんか？」

「それはありません。少なくとも、私の知っている限りでは、そういうことは一度もありません」

と、女性管理人が、いった。

「実は昨日、突然、沢田澄江さんが、亡くなられたのですが、そのことは、ご存じですか？」

と、三田村が、きいた。

「ええ、先ほど上司から、聞きました。ビックリしました」

「あなたが最後に、沢田澄江さんにお会いになったのは、いつでしたか？ その時、沢田澄江さんは、どんな様子でしたか？ 何か、いつもと変わったところはありますか？」

北条早苗が、矢継ぎ早にきくと、女性管理人は、一瞬考える眼になって、

「たしか、五月八日の、朝だったと思いますけど、沢田さんが、私のところに来て、これから旅行に行ってきます。四、五日したら、帰ってきますから、留守をお願いしますと、ニコニコ嬉しそうな顔でいって、お出かけに、なっていたんですよ。その時タクシーを呼んでほしいといわれたので、私がお呼びしました」

「どこへ行くとか、誰と一緒に行くとか、そういうことは、何か聞いていませんでしたか？」

と、三田村が、きいた。

「いいえ、何も、おっしゃっていません。沢田さんという方は、普段から、口数の少ないほうですから、その時も、何も、おっしゃいませんでしたね」

「どこに行くのかと、あなたのほうから聞かなかったんですか？」

「ええ、何も、聞きませんでした」

「どうして、聞かなかったのですか？」

「沢田さんのプライバシーに、触れるようで、こちらから、そういうことは、聞いてはいけないと思ったものだから」

「沢田さんというのは、何をされている方ですか？」

と、北条早苗がきいた。

「ご本人に、直接お聞きしたことはないので、

詳しいことは、わかりませんが、よく和服を着て、お出かけになりますし、何ととっても六十五歳なのに、その年齢には見えない、あれだけの、美しい方ですから、銀座か六本木辺りの、クラブのママさんじゃないかとも思ったんですが、夜の出入りは、少ないようでした」

と、女性管理人は、いった。

「そうですか」

と、北条早苗がいった後、三田村が、

「あなたは、沢田澄江さんが、病気や事故で、亡くなったのではなく、東京に向かっていた、新幹線の中で、殺されたことは、知っていますか？」

と、きくと、女性管理人は、一瞬、

「えッ」

と、絶句してから、

「今の刑事さんのお話、本当なんでしょうか？」

と、きいた。

テレビのニュースでは、この事件のことを、取り上げているが、まだ殺人事件とは発表していない。

犯人は、なんらかの方法で、沢田澄江に、青酸カリを摂取させたと見られていた。

「ええ、本当ですよ」

と、北条早苗が、いい、

「沢田澄江さんは昨日、広島から東京駅に戻ってきた、新幹線のぞみのグリーン車の中で、殺されていたのです。それで今、われわれ警視庁

捜査一課が、捜査を進めているところです」

と、伝えた。

「それで、管理人さんに、お聞きするのですが、沢田澄江さんを、よく訪ねてくるような人はいませんか？ 男性でも女性でもいいのですが」

と、三田村が、きく。

「私にはわかりません」

女性管理人が、いう。

「あなたは、いつも、受付にいらっしゃるわけでしょう？」

「はい、そうです」

「それなのに、わからないのですか？」

三田村が、いうと、相手は、その理由を説明した。

女性管理人の説明によると、このマンションは、オートロックになっている。だから、マンションの住人を訪ねてきた人間は、入り口についている、インターホンで部屋番号を押すと、その部屋に住んでいる人が映像で相手を確認し、開錠のボタンを押して、入り口のドアを開く。

そのあとエレベーターで目的の部屋に上がっていくシステムになっているのだという。

したがって、エントランスの受付にいる、女性管理人に断わらずに、住人を訪ねていくことも可能なのだというのである。

今度は、北条早苗が、

「沢田澄江さんは障害三級の障害者手帳を持っていて、普段からイヤホンのような補聴器を、耳にかけていたようなのですが、あなたは、彼

女が難聴だと知っていましたか？」

と、きいた。

女性管理人が、答えた。

「たしかに、私も以前、沢田さんから、実は私は障害を持っていると聞かされて、障害者手帳を、見せられたことがあります。それに、補聴器を着けているのを、何回も、見たことがあります。ですから、沢田さんが障害者であることは、知っていました。でも、症状は、軽かったんじゃないでしょうか」

「なぜ、そう思ったんですか？」

北条早苗は、聞き返した。

「だって、沢田さん、時々ですけど、補聴器をしないで話をしてることがありましたから。おそらく、ちゃんと、聞こえていたんだと思

ます」

「しかし、聴覚障害三級という障害者手帳は、役所が慎重に、調べて、発行するものでしょう？」

と、北条早苗がいった。

「ええ、たしかに、刑事さんがおっしゃる通り、役所が、判断して交付するらしいのですが、耳の判定は、一番難しいんだと聞いたことがあります。何しろ、本人が聞こえないといってしまう、それで障害者手帳が、もらえることがあるみたいなんです」

女性管理人は、決めつけるように、いった。

「それでは、沢田澄江さんの部屋に、案内してください」

と、三田村が、いった。

3

二人は、エレベーターで最上階の三十二階まで上がった。

三二〇四号室のドアには「沢田」と印刷された、小さな、表札があるだけだった。いかにも隠れ家という感じがする。

女性管理人が、マスターキーでドアを開けてくれた。

2LDKといていたが、それ以上に広く見える部屋である。

三田村たちを案内してきた女性管理人は、二人の刑事に、遠慮したのか、

「私は、一階の受付に、おりますので、終わり

ましたら声を、かけてください」

と、いつて、下に、降りていった。

三田村と北条早苗は、ゆっくりと部屋の中を見る事ができた。

まず、2LDKのあちこちを、写真に撮ってから、時間をかけて、部屋の中を慎重に、調べていった。

応接室の壁には、アンディ・ウォーホルの絵が掛かっていた。

「応接セットもハンドバッグも、ストープなんかも、どれも高そうなものばかりだけど、どれもこれもアンティークなものばかりね。一昔、ふた昔前の、贅沢品ぜいたくのような気がするわ」

北条早苗が、いった。

「そうだな。たしかに、君のいう通り、そんな

感じがするね。例えば、この応接セットにしたって、まさに、アンティークなデザインで、高価なものなんだろうが、ロココ調で古めかしい。そんな気がするよ」

と三田村も、応じた。

シャンデリアも同じ感じがした。たしかに素晴らしいものなのだろうが、どこか、デザインが古いのである。

最後に、寝室に入った時、またも古いものが見つかった。

それは、寝室の壁に貼ってあった一枚の大きな、白黒の写真だった。若くて美しい、着物がよく似合う女性の、写真である。少し焼けてセピア色だった。

じっと、その写真を見つめていた三田村が、

「これって、沢田澄江本人の、若い頃の写真じゃないか？」

「そうかも知れないわね。たしかに似ているわ。今から四、五十年前の彼女の写真かも知れない。プロのカメラマンが、撮ったみたいだわ」

と、北条早苗が、いった。

その古い写真に、写っている女性は、現在の沢田澄江と、どこか似ているようだった。ただ、十五歳の少女のようにも、立派な成人女性のようにも見えた。

「沢田澄江は、この真新しい現代的な、超高層マンションの中で、古いものに、囲まれて、生活していたようだな」

と、三田村が、いった。

三田村がいうように、部屋の中には、家具も

電器製品も、新しいと思えるようなものは、一つなかった。

二人は、改めて、部屋の中の、気になるものをカメラに収めてから、捜査本部に、帰ることにした。

4

すでに、丸の内警察署に捜査本部が置かれていた。

二人の刑事は、その、捜査本部に帰り、「グランド等々力」の女性管理人から聞いたことを報告したあと、沢田澄江の自宅マンションで、撮ってきた写真を、十津川や亀井に、見せることにした。

その一枚一枚の写真を、モニターの画面に、大きく映しながら、北条早苗と三田村が、十津川に説明した。

「ご覧のように、沢田澄江の自宅は、二年前に、等々力の駅前 completion した、真新しい三十二階建ての、超高層マンションの最上階です。部屋の中心に入ってまず、私と北条刑事が、気づいたのは、さまざまなもの、例えば、応接セットなどの、調度品とかストープとか、あるいは、シャンドリアとか、そうしたものが、全体的なものなのに、かなり古いデザインのもので置かれているということ。まるで、被害者は、五十年前とか、そのくらい、古いものを買い集めては、部屋を飾り、その中で、生きていたような、そんな感じがしました。その典型的なもの

がこれです」

三田村は、寝室の壁に貼ってあった、白黒写真を、モニターに映し出した。

何かを、踊っているような、そんな一瞬を、とらえた写真のようにも、見える。

「それにしても、ずいぶん古い写真だな。相当昔、四、五十年前に写したものでないか」

亀井が、感心したように、いうと、横から、十津川が、

「この若い女性の写真だが、被害者、沢田澄江の、若い時の写真なのかね？」

と、きいた。

「多分そうでしょうが、まだ断定はできません」

と、三田村が、いい、それに、つけ加えるよ

うに、北条早苗が、

「似ていますから、私は、被害者、沢田澄江の若い頃の写真ではないかと、思います」

「この白黒写真は、被害者のマンシヨンの、寝室の壁に、貼ってあったんだらう？」

と、十津川が、きいた。

「そうです」

「だったら、被害者本人の写真だと、考えてもいいんじゃないのかな。常識的に考えれば、他人の写真、それも、何十年も前の他人の写真を、わざわざ、自分の寝室に飾ったりはしないだろう」

「私も、警部の意見に賛成です。被害者本人の写真と、考えていいと思います」

と、北条早苗がいい、言葉を続けて、

「それに、沢田澄江の部屋の中には、最新のデザインのもので、全くありませんでした。家具や台所用品にしても、そこに、あったのは、どれも形が一昔以上前のデザインのものばかりです。もちろん、本人の趣味なんでしょうが」

と、いった。

「一つ、君たちに、確認しておきたいことがあるのだが、沢田澄江は、五月八日の朝、マンシヨンの、女性管理人に向かって、旅行に行く。四、五日したら、帰ってくる。そういつて、呼んでもらったタクシーに乗って、出かけたんだな？ それは、間違いないんだな？」

と、十津川が、きいた。

「そうです。女性管理人は、そう、証言しています。タクシー会社にも確認しました」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。